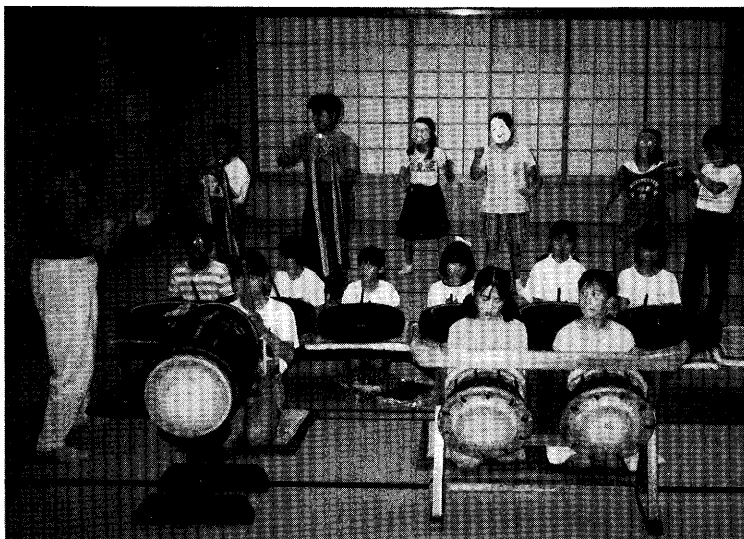


郷土あれこれ

郷土館たより
第32号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425・96・4069

五日市の祭り囃子



練習風景

留原囃子保存会

はじめに

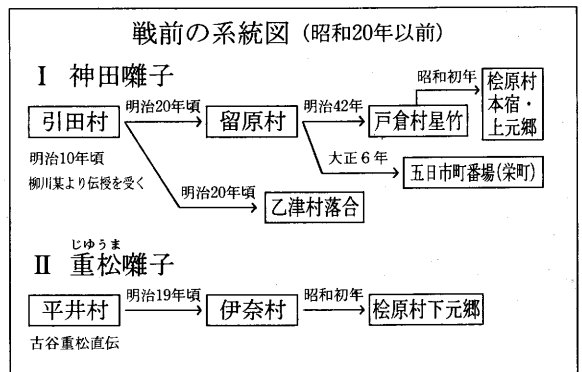
郷土あれこれ6号で「獅子舞の話」をとりあげたので、今回は「祭り囃子」をまとめてみた。現在郷土の民俗芸能の見直し、復活が盛んで、各地に保存会が結成され、保護育成がはかられている。ところが保存会ができて後継者難で頭を痛める例が多いが、お囃子に関するかぎり状況は明るい。レトロブームに乗ってか、小中学生の伝習希望者が結構ふえてきた。いま町内に15のお囃子団体があるが、そのうち昭和50年以降結成されたものが6団体もあり、中には各地のコンクールや祭りに出演、伝統の古い保存会をしのぐ活躍を示す団体もある。新興の囃子連は子供たちの養成に力を注ぎ、将来の明るい展望が予想されるところが多い。どうやらお囃子は終戦直後につづく第二の興隆期を迎えたように思われる。

今回、郷土館より町内の伝統芸能団体の沿革、現況等について詳しい報告をいただいたので、それをもとに伝播の系譜から話をすすめよう。

1. 伝播の系譜 ^{でんぱ} 神田と ^{じゅうま} 重松

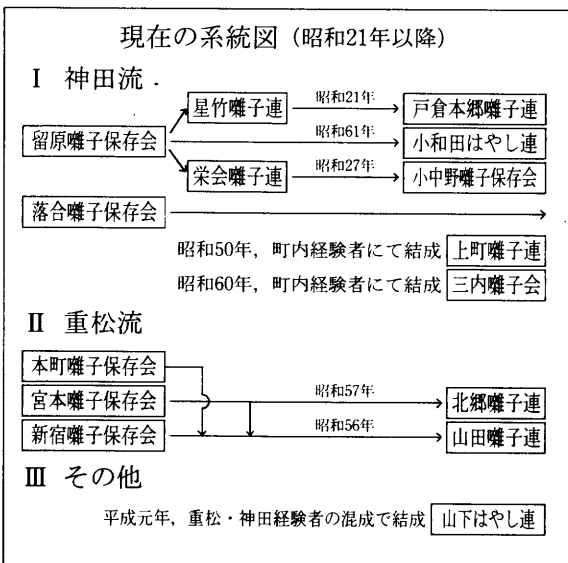
下図にみるように、五日市町の祭囃子は神田、重松の二流からなり、ともに明治20年前後に習得したものである。

神田囃子は江戸三大祭の一つ神田明神の祭りに奉納されたお囃子である。起源をたどると、享保期（1720頃）葛西囃子が創案され、神田明神にも演奏されていたが、いつしか地元神田の者が習い覚え、新井喜三郎という名手が出て、神田囃子の声価を高めた。その系譜が各地に広まったという。（東京都の文化財(二)・他）



西多摩地方には、明治初年小曾木村の若林仙十郎（扇十郎）が広めたが、その弟子柳川某が明治10幾年かに引田村に伝えた。留原村では長老連が若い衆の健全育成の為、

引田の囃子を習得させ、氏神八坂神社の祭礼に奉納したのが始まりで、大太鼓を近年張替えたとき、胴内に明治22年新調の墨書をみた。これからも明治20年頃伝習とい話が裏付けられる。神楽(舞)もこの時一緒に習ったという。(留原囃子保存会報告書)



一方、**重松囃子**は所沢村の笛の名手古谷重松(天保元~明治24)によって創出された。彼は染料の藍玉の商いを家業としていたが、紫染に必要な「神の灰」を買いに当地を訪れ、平井村の若者に乞われて直伝したと伝えられている。伊奈村の若者が平井より指導をうけ、今日に伝承された。また舞はやや遅れて竹間沢村(現埼玉県入間郡三芳町)の左近流里神楽の師匠より伝授を受けた。(新宿保存会・他)

神田囃子は乙津村落合にも伝えられたが、留原村の青年達がとくに熱心で、旧地藏院本堂(クラブとして使われた)で夜ごと練習にはげんだ。戸倉星竹では明治42年、この留原から師匠(熊さんと呼ばれた)を招き、ここにも神田囃子の第二の拠点が生まれた。

今回、留原囃子保存会の指導者のお一人来住野武さんを訪ね、お囃子の入門から、見どころ、聴きどころに亘って、お話をうかがった。(聞き手・文責 石井)

2. 五人囃子と楽器

一 お囃子とは、はやすという言葉と同じで調子をつける一種の伴奏ですね。

武 そう。舞と一緒に神さまに奉納するものですね。春祭りなら、五穀豊穡を願い、秋祭りなら収穫を感謝してね。この辺の囃子は江戸囃子のなかの神田囃子で、神明明神の祭

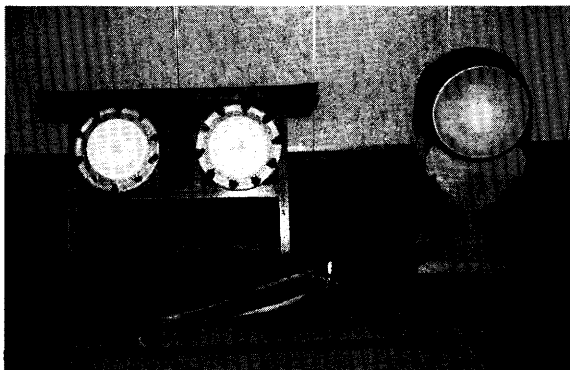
ばやしです。御輿にあわせたものだと思いますね。

一 みこし担ぎをはやし調子づける。

武 そう。それが本来の目的の五人囃子です。

一 五人というところ。

武 大太鼓1つ、小太鼓2つ、それに笛と鉦で五人です。



鉦はヨスケともいいます。与助とでも書くのでしょうか。おどけた意味も込めているようです。鉦は簡単なようで、なかなかむづかしく、笛太鼓の調子をとる働きをします。聞いていて与助の技術のよしあしで、囃子がまるつきり違ってきこえる。

一 小太鼓は別名何とかいいましたね。

武 ツケといいます。大太鼓に近い方を地といい、遠い方を絡といいます。私どもの神田囃子は地も絡も全く同じ調子で叩き、大太鼓がそれに絡みますが、重松は二つの小太鼓同志がからみ、そこにさらに大太鼓がからんでくる。

一 複雑になりますね。

武 そうですね。

一 五人囃子の中で、何が全体をリードするのですか。

武 それは笛ですね。曲の選定とか変り目とか。まず笛がピーとくる。

一 曲が流れるように変ってゆくのは笛がリードするからですね。

3. 曲目について

一 曲目について教えてください。

武 まず「屋台」ですね。これは一番最初にやる。威勢のいい囃子で、獅子が出たり狐が出たりします。あとは私どもでは「四丁目」「昇殿」「仁羽」「鎌倉」の順ですね。もっともこれは流派によって違います。一巡したあとは状況によって曲を選びます。

一 四丁目とはどういう意味ですか。

武 昔江戸城へ上ったときの何とか四丁目という地名だ

とか、鎌倉も鎌倉^{がし}河岸だとかいう説がありますが、どこまで本当か、わかりませんね。

一 四丁目は仕丁舞とも書かれますね。

武 昇殿も四方殿と書いたりします。また仁羽は忍馬、人馬とも書きますが「もどき」とも呼びます。おかめ、ひょっとこなどの道化役（注・もどきという）が出て踊るからです。私どもの囃子はもとは青梅の黒沢から出たものですが、初めに伝わらなかった「ふる囃子」という曲があり、これは屋台よりも一段と威勢のいい曲なので、最近習って持曲の中に取り入れました。

一 いまは万事テンポの早い時代ですから、曲も早い方が好まれるでしょうね。古囃子でなくモダン囃子ぢやないですか。

武 アハハ、そういうことですね。山車^{だし}が出合^あって競り合うときなどにやりますね。

4. 踊りについて

一 踊り（舞い）について教えてください。

武 曲のそれぞれに出るものがきまっています。屋台は獅子と狐^{てん狐}が出ます。四丁目は、かわずという面。

一 かわずは河童ですか。

武 いや、かわずはかわず、河童は河童です。それから四丁目。

一 四丁目なんてお面があるんですか。

武 鼻の下の長い面で、鼻くそを丸める動作などもする。ひょっとこ、一文字、大笑いなどの面でも踊ります。昇殿は道化の面をつけたものが、扇を立てて踊ります。仁羽は浮かれ出すような曲に乗って、おかめ、ひょっとこが踊ります。

一 馬鹿面^{めん}というのがこれですね。

武 鎌倉はゆっくりした曲で、笛を聴かせる曲目です。ツケはバチ数が少く、大太鼓がおもに叩かれます。踊りは獅子など出ますが、眠りの動作をします。ふる囃子は外道^{げどう}や狐が出て、曲にあわせて激しく踊ります。

一 踊りには、きまった動作と踊り手が即興的に舞える部分とがあるんでしょうね。

武 踊り手に任される部分が多いです。

一 お面によって性格はきまるが、表現の所作は自由に選べる—

武 そう。私は踊りはあまりやりませんが、踊りは踊りで奥があるように思います。コンクールでは踊りと囃子とは別々に審査します。

一 昔 ある小さな神社の庭で、おかめの踊りをみたこ

お面のいろいろ



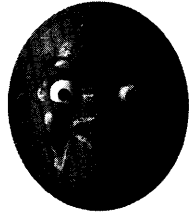
おかめ 1



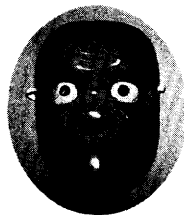
きつね



おかめ 2



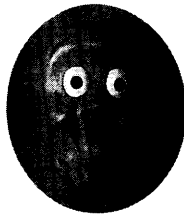
ひょっとこ



かわず



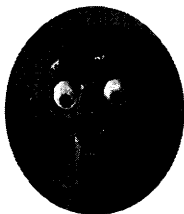
げどう



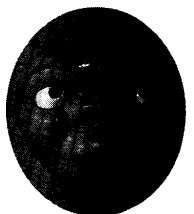
しちょうめ



大笑い



こおろぎ



ひるこ

とがあるんですが、男女のセックスの動作を暗示させる踊りでした。周囲の雰囲気からして、素朴な笑いを呼んでいましたが、ステージではちょっと—

武 男女の交わりは種族の保存とか、五穀豊穡に通ずる

ので、神を祭る踊りに含まれて当然なんです、ステージではどうしても卑俗なものに見られます。コンクールが意識されると、踊りも上品になりますし、曲もあきさせないようにテンポが早く、色々工夫が加えられます。

一 お囃子が変わってゆく。

武 進歩という面と、本来の伝統が変質するという面とがあるでしょうね。

5. 練習について

一 来住野さんはお囃子のどこに魅力をお感じになってますか。

武 私は笛を吹きますが、笛の吹き手は少いのでどうしても頼りにされます。なかなか年期のいるもので、今でも時間があれば毎晩でも吹いています。他所でいい笛を聞くと、どうしたらあの音色が出るかという工夫してみる。笛は同じ穴から二つの音が出るのです。ピーという高い音と、ゆったりした音が出る。尺八をよく首ふり三年といいますが、横笛もきりがありませんね。

私の祖父は嘉十といって、留原村の青年として、引田から囃子を習った最初の仲間の一人ですが、鉦専門でした。鉦の音だけで、あれは嘉十さんだといわれたそうです。

一 武さんの笛もすぐわかる。

武 いや笛は誰が吹いてもわかりますが、鉦はねー

一 子供たちを指導するときは何から初めるんですか。

武 曲目はまず屋台から、楽器は小太鼓ツケからです。テンテンテケテンテン・テン、テケテンテン、テケテンテンのリズムをしっかりと習う。これが基本ですから。屋台の前奏に「ぶっ込み」というのをやる。これをマスターして屋台に入り、屋台を終えたら仁羽の曲をやらせます。屋台・仁羽をこなせたら、一応の仕上がりです。

一 初級免許ですね。子供はつづきますか。

武 小さい子供は祭にひかれ、友達にひかれ入ってきます。今、一週一回の練習です。熱心なものもいれば、合わないで止めていく子もいますが、今の子は覚えるのが早いですね。中学の三年頃になると受験の関係からやめますが、小さいとき習ったものは、体のどこかに残るものですね。

一 私は子供の頃ヤソ淵の崖上（河川公園の対岸）に住んでいましたが、夜ごとに秋川の瀬音をこえて留原の祭り囃子が聞こえてきました。子守唄のように夢うつつに聞いたものです。

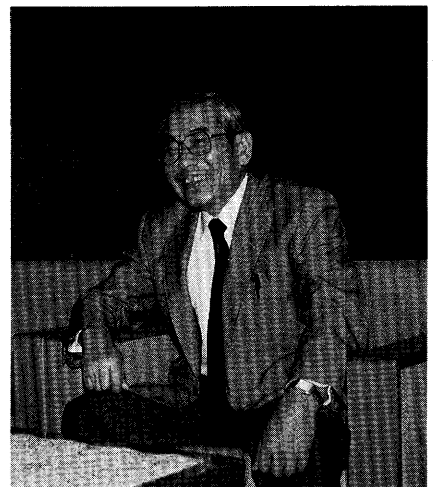
武 囃子は遠くで聞くのもいいものです。

一 昭和一ケタの頃でしたが、あの頃は夏になると留原では毎晩練習していたんですね。

武 農村青年たちの数少ない楽しみでした。

一 嫋嫋とした遠音の祭り囃子を聞いていると、ホテルが蚊帳の外を舞ったりしました。そんな幼児期が懐かしく思い浮べられますね。

武 若い衆達が囃子に夢中になれば、悪い夜遊びの暇もなくなるんです。



来住野武さん・役場収入役室にて

おわりに

来住野武さんのお話によると、留原の囃子は戦時中も細々ながら続けられ、終戦になって青年たちが復員した昭和20年代はどっと復活に燃え立ったという。これは各地共通の現象であった。その頃、囃子は各地の青年団に守り支えられていたが、昭和30年代に入ると青年団の衰退や解体が相ついで。それは経済の高度成長期に一致する。留原では郷土の伝統芸能の行末を危惧した人々によって昭和30年代に保存会が結成された。長老達によって後継者の育成も組織的に行われるようになり頼勢はようやく喰とめられた。その間日本の経済成長は続き、物質的には余裕のある時代になったが反面、都市化に伴う個人本位の風潮と汚染のすすんだ生活環境にとり囲まれるようにもなった。人々はうるおいを求めた。「ふるさと回帰」とか「手造りブーム」はそれを反映する。現在、祭り囃子が隆盛期に入ったのは保存会関係者の努力もさることながら、連帯感の喪失に気付いた人々がふるさとのやさしい調べをもつお囃子やお祭りへの回帰を求めているように思える。そこには忘れられた土の臭いのする心の交流がある。一方、コンクール参加などによって、お囃子が変質してゆくのも止むを得ないことで、伝統は時代に合わせ脱皮を繰返し新たな装を加えつつ続いてゆくものではあるまいか。

91・4・21